

I 次の文章を読んで、後の問い（問1～11）に答えよ。（配点 75）

あつ、雪！

「ことばの宇宙」という言い方がある。それは私たちが、直接に目で見、耳で聞き、手で触って確認できるものの世界を離れて、ことばがことばだけで一つの世界をなすことをいう。ことばで語られた物語世界を聞き、また読むときに、この比喩がびたりとはまる。

しかし、もとよりことばは最初から宇宙をなしていたのではあるまい。系統発生的にも個体発生的にも、ことばが最初に降り立つのは、人々が生身の身体で生きている世界である。身体で生きる^aボウダイな広がり^aのなかでみたとき、その最初のことばはまだ大海にたらしただほんの一滴の水のようなもの。そこからことばがことばだけで世界を立ち上げるようになるには、ずいぶん長い過程をへなければならなかつたはずである。いや、すでにことばの宇宙をそれなりに成り立たせている私たちにおいても、日常的に体験することばの多くは、周囲世界にはめこまれたかたちではじめて意味を得ているのであつて、それだけで立つことは少ない。

「あつ、雪！」、幼い息子が叫び声を上げる。その声につられて空を見上げると、綿帽子のような雪片がふわふわと高い空から舞い落ちてきて、その雪の一ひらが頬にあたる。こういう場面を私がじかに体験したとする。息子は、もちろん雪の落ちるその世界を目の前にしてことばを発したのであり、また聞いた私も、自分の身体に感じたこの世界のなかにこれを受けとめたのである。そこでことばが身体の世界に寄り添い、そこに重なる。ことばが発せられたことで、身体だけで生きられたのとは違うもう一つの世界への窓が、ここにわずかであれ開かれたと言つてもよい。しかしもちろん、それだけで宇宙をなすところまでは遠い。

では、こんな場面はどうだろうか。閉めきつた障子の内で火鉢にあたりながら餅を焼いている私の耳に、外から子どものはずんだ声が飛び込んでくる。

あつ、雪！

ここで私は、自分の身体でその雪を **ア** 。にもかかわらず、子どもの一声に、私のなかで雪の舞い落ちる世界が立ち上がる。自分が身体でじかに体験しているのは部屋のなかの光景、そのうえに不意に飛び込んできたことばが、別のもう一つの世界を立ち上げるのである。もちろんそうは言つても、障子一枚をはさんで、私の身体は、子どもの生きる世界にほとんど^pリソ^pジヨウしている^pのであつて、これをまだことばの宇宙とまでは言えまい。

しかし、次のような場面を書物で読んだとすればどうだろうか。

庭でコマ回しに興じていた子どもが、不意に「あつ、雪！」と叫んで空を見上げた。大きなぼたん雪が、鉛色の空からゆらりゆらりと舞い落ちてくる。

ここでも私たちは、しつかりその雪の落ちてくる情景を思い浮かべる。たとえこれを読んでいるのが真夏で、ステテコ一枚で、団扇^{うちあ}をバタバタやっていたとしても、その雪の場面を理解するのに

不都合はない。ここまで来たとき、ことばは現実の場面を離れて、それだけで一つの世界を立ち上げる、そういう力をもつと言える。そこにことばの世界と身体の世界の二重化をはっきり見ることができる。

このいま にはないもう一つの世界を立ち上げる

これは私たちがしじゅう何気なく経験していることであるので、ことあらためて言うほどのことではないと思われるかもしれない。しかしこのごく **I** な二重化の構図こそ、まずは私がここで確認しておきたいことなのである。念押しに、手近で見つけた小さな詩歌からさらに二つ例を引く。

雪がコンコン降る。

人間は

その下で暮らしているのです。

戦後、日本がまだ非常に貧しかったころ、山形県の寒村に暮らした子どもたちの生活綴り方の一作品である。しかし、そのことを知らなくとも、これを読む私たちのまえには、一つの光景がある気分をもって広がる。いまこれを読んでいる私の目のまえでは、もちろん雪など降っていないし、家々を厚く真つ白におおった雪景色も見えない。しかしこの三行の文を読んだだけで、そうした世界が眼下に広がる思いがする。たったこれだけの文章が一つの宇宙を語っているとも言える。

あるいはこんな歌がある。

四十代 この先生きて何がある風に群れ咲くコスモスの花

この少々虚無^d的で、悲しい歌は、道浦母都子^{みづはもとこ}の作品。彼女はたまたま、私と同じ一九四七年の生まれである。学生時代をはば同じ時代状況のなかに生きて、その是非はともあれ「全共闘歌人」と呼ばれてきた。しかしこの作者の生きてきた過程のあれこれを知らずとも、この歌は歌で一つの世界を立ち上げている。

ここでも私たちは、いまコスモスの花群れを見ているわけではないし、それをそよがす風を頬に感じているわけでもない。にもかかわらず不思議なことに、この文字のならびのなかに一つの情景が浮かんでしまうのである。

甲

身体がその生身で直接に生きる世界とは別に、ことばがそれだけで独自に開く世界がある。そのことを人は「ことばの宇宙」と呼んできた。もとよりそれは一つの比喩である。ことばがまったく身体の世界からの支えなしに、それだけで成り立つなどということは、本来ありえない。

身体が生きる世界を離れ、それとの関係の一切を断ってしまったところでは、個々のことば自体が意味をなさない。だいいち、語り出す声は身体から発する息の音であり、書きつけた文字は身体

の仕草^{しぐさ}の痕跡である。この身体を出入りする息、身体^{からだ}の紡ぎ出す仕草ぬきに、ことばはありえない。これはあまりに当り前のことである。

しかしそれだけではない。ことばで語り出す世界の中身そのものが、この生身で生きる世界を離れては、根を失う。雪を肌^{はだ}に受けて震える身体、その下で冷たい冬を過ごす身体をぬきには、「yuki」はただの音声にすぎないし、「雪」の文字は **I**。あるいは風の音を聞き、それが頬に触れる感^{かん}触^{しゆ}をもつ身体を離れては、「kaze」はただの無意味な音声以外のものではなく、「かぜ」はただの無意味な綴り^{ずい}でしかない。ことばはすべて、どこかで身体の世界に根ざしている。これもまた自明の理である。

にもかかわらず、「ことばの宇宙」という言い方は単なる比喩を越えた側面をもつ。なにしろ身体の世界は、その身体^{からだ}のいる〈ここのいま〉に縛られ、その身体^{からだ}の位置を基点とする遠近法をまねがれることができない。

ところがことばが立ち上げる世界のなかでは、知らないうちに〈ここのいま〉の自分の身体^{からだ}の位置を抜け出し、視点を移動させて、そのことばの世界のなかに身を移してしまっている。たとえば小説を読みふけると、読んでいる自分がその世界のなかに移り住んでいるかのように錯覚する。そうした錯覚^{さくかく}のうえで人はことばの宇宙を楽しみ、またそこに巻き込まれて苦悩する。

このことは別に文章のうまい下手にかかわらない。いかにたゞたどしくともことばはことばである。ことばは身体に根ざし、それでいて身体を越えるもの。そうしたリヨウギを本性とする。

「死」ということばとその観念

雪とか風はこの身体で体験できる。ところがこの身体で体験できないものでさえも、人はこれをことばにして語り、しかもそれが **ウ** 現実感を帯びる。たとえば、人は自分が死ぬということを考える。もちろん考えようが考えまいが、生き物としての人間はかならず死ぬ。ならば死ぬことを考えていつたい何になるのかわからない。わからないけれども、それでも考えてしまう。おまけに考えてはやたら怯^{おび}え、不安にかられるのだから、たちが悪い。

ほんとうを言えば、身体の世界に即して見るかぎり、人は自分の死を体験できない。私が死ぬとき、その死を体験するはずの私自身も死ぬのであるから、 **II** に言つて自分の死を体験することは不可能なのである。

臨死体験などということのことさら話題にしたがる人もいるが、それもしつは死にはしなかったから語れることであつて、実際には死の体験ではない。にもかかわらず、人間にとって死は、いつか自分をおそうはずの現実として意識から簡単に去つてくれない。それは、「死」が自分の **III** のレベルにおいてではなく、 **IV** のレベルで、私たちのことばの世界にしつかりと食い込んで、私たちを離してくれないからである。

いや死にかぎらず、人は自分の出生を体験することもできない。母の胎内から生まれ出るとき、それを経験として自分のなかに受けとめるだけの「私」がまだ成立していない。 **I**。それゆえ自分の身体^{からだ}のレベルに関するかぎりでは、〈ここのいま〉をこうして生きている実感はあつても、その前と後ろは漠^{はく}たる空白でしかないし、さらにこの生^いの出発点と終止点となると、もはや私たちの視野を完全に越えている。

ところが、どういうわけか、私たち人間は、自分の「人生」などというものを思い描いて、〇〇年〇月〇日の「誕生日」にはじまり、やがて〇〇年〇月〇日の「命日」に終わるであろう数十年の時間の流れを、観念のうえでこの生身の生のうえに重ねてみる習性をもってしまった。「誕生」も「死」も、これを自分のものとしては体験できないにもかかわらずである。

もつとも誕生のほうは、いま自分がこうして生きているその出発点として、だれにとつてもすでに現実化した一つの事実としてある（経験としてではないが）。それゆえであろう、これが私たちのなかで「問題」として登場することは少ない。ところが、死のほうはそうはいかない。死は私たちの明日の側にひかえていて、いずれ確実にやってくるものであり、しかもそれは、このいまの自分のシヨウメツとしてイメージされる。

かくして人は死に怯える。正確に言えば「死」の観念に怯える。そしてこの観念が人間の生きるかたちをどれだけ左右してきたであろうか。たとえば、人間のみが自殺をはかることができるというのも、このことによる。つまり自殺を行なうことができるためには、少なくとも自分の死を考えることができなければならない。死の観念、あるいは死ということばの獲得が、自殺の最低必要条件をなすのである。

ことばによってかたちを得た観念が生身の身体を縛り、その生命を奪うことすらある。ことばどさように、ことばは身体で生きる時空世界を越えて、もう一つの世界を立ち上げる。

(浜田寿美男『私』とは何か』、講談社、1999年)

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直せ。解答は解答用紙の所定欄に読

みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は 1 ～ 7。

a ボウダイ

1

b リンジョウ

2

c 興

3

d 虚無的

4

e リョウギ

5

f 漠

6

g ショウメツ

7

問 2 空欄 **I** ・ **II** に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は **8** ・ **9** 。

I

- ① 一元的 ② 意図的 ③ 二元的
④ 日常的 ⑤ 可視的

8

II

- ① 標準的 ② 原理的 ③ 網羅的
④ 究極的 ⑤ 経験的

9

問 3 空欄 **III** ・ **IV** に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **10** 。

- | | |
|-----------------|--------------|
| ① III 身体 | IV 観念 |
| ② III 経験 | IV 意識 |
| ③ III 身体 | IV 現実 |
| ④ III 経験 | IV 身体 |
| ⑤ III 意識 | IV 現実 |
| ⑥ III 意識 | IV 身体 |

問 4 空欄 **A** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **11** 。

- ① 周辺世界にはめこもうとしているわけではない
② 感覚しようとしているわけではない
③ ことばにして語っているわけではない
④ 直接に感覚してはいない
⑤ 意味づけているわけではない

問 5 空欄 **イ** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **12** 。

- ① 意味不明の模様にはすぎない
② 冷たい雪を指し示すにはすぎない
③ 身体の仕事の痕跡にはすぎない
④ 空想世界の表現にはすぎない
⑤ 意味をなさない比喩にはすぎない

問 6 空欄 ウ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 雪や風と足並みをそろえた
- ② 雪や風に勝るとも劣らぬ
- ③ 雪や風を吹き飛ばすような
- ④ 雪や風を越える
- ⑤ 雪や風に歯が立たない

問 7 空欄 エ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 生も死もことばでしか語ることはできないのである
- ② 生も死も自分の経験にはなりえないのである
- ③ 人は自分の生死を語れないのである
- ④ 人は自分の生死を受け止められないのである
- ⑤ 「私」は自分の生を客観視できないのである
- ⑥ 「私」は自分が生きていると実感するだけなのである

問 8 傍線部 A 「その身体的位置を基点とする遠近法をまねがれることができない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 身体的位置から「ことばの宇宙」を見てみると、遠く離れていてまるで錯覚のように感じられるということ。
- ② 身体の世界においては、遠くのは小さく、近くのは大きく見えるため、ことばの世界で起こりうるような錯覚は起こらない、ということ。
- ③ 身体の世界においては、〈ここのいま〉のじぶんの身体を抜け出し、視点を移動させるようなことが、不可能であるということ。
- ④ 〈ここのいま〉のじぶんの身体から見ると、小説を読んだときに、自分がその世界に移り住んでいるかのように錯覚してしまうということ。
- ⑤ 〈ここのいま〉の身体の世界に起こりうることは、ことばの世界から見ると遠く感じられてしまうということ。

問 9 傍線部 B 「ことばの宇宙」について、本文中で述べられている内容として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 生身で直接生きる世界とは別に、ことばがそれだけで独自に開く世界を、「ことばの宇宙」と呼ぶ。
- ② 「ことばの宇宙」とは一つの比喩であるが、ことばが身体の世界からの支えなしに、それだけで成り立つということはありません。
- ③ 「ことばの宇宙」があることにより、身体が生きる世界をまったく離れてしまっても、文字のならびのなかに一つの情景が浮かんでしまう。
- ④ 自分の身体の位置を抜け出し、視点を移動させて、ことばの世界の中に身を移してしまうという意味で、「ことばの宇宙」という言い方は単なる比喩を越えた側面をもつ。
- ⑤ 小説を読みふけると、ときに私たちは「ことばの宇宙」を楽しみ、またそこに巻き込まれて苦悩する。

問 10 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 身体の仕事と、身体から発する息の音
- ② 生身の世界と、ことばの世界
- ③ 身体が支え、ことばが開く
- ④ 「ことばの宇宙」の楽しみと、苦悩
- ⑤ 身体に根ざし、身体を越える

問 11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、完答しなければ加点しない。解答は解答番号 18 の二ヶ所にマークすること。

- ① ことばで語り出す世界は、生身で生きる世界に根ざしてこそ意味のある文字となるが、身体を位置を抜け出して、まるでことばで語られた独自の世界が存在するかのように感じられることもある。
- ② 私たちは、生も死も自分のものとしては体験できないにもかかわらず、「ことばの宇宙」が立ち上がりながらも、あたかも生死を経験したかのように語るようになった。
- ③ 子どもの「あつ、雪！」というはずんだ声を聞くと、自分が直接体験していなくても、「ことばの宇宙」がそこに立ち上がり、情景を思い浮かべることができる。
- ④ 身体がその生身で直接に生きる世界とは別に、ことばがそれだけで独自に開く世界では、個々のことば自体が身体を離れて固有の意味を獲得している。
- ⑤ ことばがあることによつて、身体で体験できないものでさえも現実感を帯びて感じられるため、例えば人は「死」という觀念に怯え、自殺を行うことさえある。
- ⑥ 「ことばの宇宙」は、生身の身体で生きている世界から切り離されてこそ、生き生きとした情景を目の前に浮かび上がらせてくれる。
- ⑦ コスモスの花を歌った道浦母都子の作品において、その文字のならびのなかに一つの情景が浮かぶのは、道浦と同じ時代状況のなかに生きてきた体験がある場合である。
- ⑧ 身体で体験できる「雪」や「風」だけでなく、自分のものとしては体験できない「誕生」や「死」までもが現実感を帯びるのは、だれであれ生死がすでに現実化した一つの事実になるからである。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えよ。（配点 75）

甲

人間の身体は環境に適応して発達したものであるから、その環境によって身体の高さ、手足の長さ、皮膚の色、毛髪の色やちぢれ方などが異なる。眼も異なるものに属する。アルプス以北のヨーロッパのような暗い環境と、日本列島のような明るい環境とでは、異なったタイプの眼が形成されることは、生物学的に当然であろう。

ただ、眼球の構造は同じだ。ちがうのは、いわば外装材である。光の乏しいヨーロッパでできた眼は、薄手の材料でつくってあり、光をたくさん取りこむ。光の溢れるわれわれの国でできた眼は、厚手の材料でつくってあって、強い光の害を受けることがない。薄手と厚手の差はメラニン顆粒^{かりゅう}（黒やカツシヨクの色素）^aが少ないか多いかの差なのである。

色素の少ない眼について、瞳のまわりの虹彩を観察すると、淡い茶色か、グレイか、さもなくば淡い青か緑だが、いずれにしても、眼球の奥の方まで透けて見えるかのように透明度が高い。虹彩の裏側には色素層があるが、表側には色素がないからである。そして、虹彩の中央に黒い瞳がぼつんと目立つ。それに対して、色素の多い眼では、虹彩の表にも裏にも色素層がある。そういう眼の虹彩は濃い茶色だが、それが真ん中の瞳の黒と一体となって、黒っぽい眼に見える。以下では、前者を、必ずしも正確ではないが、われわれが西洋人をさしていう俗称を借りて「青い眼」と呼ぶ。そして、後者を、これは大略その通りであろう、「黒い眼」と呼ぶことにする。

蛍光灯が普及した一九五〇年ころから、欧米では、グレア（まぶしさ）の研究が盛んになった。光源の明るすぎによる不快なまぶしさは、「青い眼」には大きな問題である。光は、強くなると、瞳孔からだけでなく、虹彩を通して侵入するからだ。ところが、不快なまぶしさの研究は、欧米の学者が熱心なのに比べて、日本ではあまり興味をもたれなかった。「黒い眼」では虹彩が光を遮断する能力が高いので、日本の研究者自身が、まぶしさをそう **ア** せいだろう。ほかの分野でもよくあることだが、国際的な研究課題だから、日本も少しはやっておこうという、あと追いつ研究がいくつかあった程度だった。

それでも、六〇年代に入ると、予想通り、「黒い眼」は「青い眼」よりもまぶしさに鈍感であること、まぶしいかまぶしくないかの境目の輝度を測ってみると、「黒い眼」は「青い眼」の倍くらい高いこと、を示す研究が出てきた（市川宏、長南常男「まぶしさの快不快限界線に関する基礎的研究」）。まぶしいと感じはじめる輝度が倍もちがうということは、「黒い眼」が「青い眼」よりも、まぶしさに対する耐久力が倍もあることを示す。たいへんなちがいといってよい。

「黒い眼」が「青い眼」よりもまぶしさを気にしないことは、オフィスでの蛍光灯の使い方の^bビのちがいにも現れていた。蛍光灯は、普及時は乳白色のプラスチックでおおうのが欧米の常識だったのに対し、日本流はむきだしのままだった。極端な場合、日本では、もともとの設計がプラスチックのカバーつきなのに、ユーザーがそれを取りのけて使った例すらある。

最近のコンピューターのたくさん入りこんだオフィスでは、照明の光がブラウン管や液晶の画面に映りこまないように、今度は照明器具にセイコウなルーバー^c（ランプ下方に取りつける、格子状に組んだ羽根板）が備えられるようになった。欧米ではそういうハイリヨのないオフィスは、探す

のに苦勞するほど少ないが、日本での関心は今一つである。身辺を見まわしても、新しい照明器具はルーバーつきでなくてはならないと考える管理者といい、照明の映りこみを苦にするワーカーといい、ともに少数派だ。このような傾向もまた、「黒い眼」がまぶしさに鈍感であることをはつきり示す。

I、虹彩の真ん中に開く穴が瞳であるが、その瞳の大きさは明暗によって変化する。しかし、瞳の直径は最大で約八ミリ、最小で二ミリだから、最大と最小の面積比は、それぞれの二乗の比、六四対四、すなわち一六対一にすぎない。このくらいのちがいで、明るいとき瞳が最小になっても、眼球を守るのにあまり役立たない。その上、「青い眼」では虹彩からも光がもれ入ってしまう。「青い眼」にとっては、夏の戸外用の黒眼鏡も、観光バスの窓のグレイ・ガラスも、眼球保護のためのヒツジゴ品なのである。

明るさから暗さく

「青い眼」が「黒い眼」よりまぶしさに敏感であることは確かのようにだ。では、ふつうの明るさの範囲でも、両者の能力には差があるのだろうか。一例として、読書に最適の照度を取り上げると、「青い眼」は、まぶしさに敏感である分、通常の明るさにも敏感で、つまるところ **I**、というようなことがいえるのだろうか。じつは、実験的データはなにもない。それだけでなく、そもそも読書に、ある一定の照度だけが最適などということはいえないのである。

眼は、多少のことなら、明るくても暗くてもついて行く。**II**、読書のような簡単な仕事なら、たとえば一〇〇ルクスで格別不自由はないし、五〇〇ルクスであろうと、一〇〇〇ルクスであろうと、もつとけつこうというだけのことだ。どの照度でも、眼は機能する。ただ、ポケット辞書の小さな活字だと、一〇〇ルクスではつらい。ふつうの本でも一時間休みなく読みつづけるなら、一〇〇ルクスでは疲れるだろう。一〇〇ルクスと五〇〇ルクスを比較すれば、五〇〇ルクスに分がある。**III**、読書に関しては、五〇〇ルクスと一〇〇〇ルクスとの効果の差は出そうもない。最適値がたった一つの点のはずはないのであり、最適範囲という、ある程度長い線ではなくてはならないのである。

眼にかぎらず、一般に、人間の感覚器官は、外からの刺激に応じて感受性を変化させる。一つには、過度に強い刺激から自分を守るためであり、今一つには、過度に弱い刺激を敏感に感知するためである。これらは両極端だが、そうでない中間の場合も、感受性を中くらいに保って、そこにある刺激の強弱を正しく判断することは必要だ。いずれも人間の生存に不可欠である。このように感覚器官の感受性が変化することを順応という。

五〇〇ルクスの本のページに順応した眼は、たとえばそのページに写真があった場合、写真のこまかい明暗を正しく読み取る。同じ写真が一〇〇〇ルクスになろうと、あるいは一〇〇ルクスになろうと、眼はすばやく順応して、写真の明暗を同様に正しく読み取る。こういった明るい表面の、しかも中心部を見るのは、眼のもつとも得意とするところだ。これを行うのは、網膜の中心窩にある錐体である。

ただ、いくら解像度抜群の錐体でも、感受性を一定に保つたまま、一〇〇〇ルクスから一〇〇ルクスのあいだの、すべての映像の明暗差を読むのは無理だ。映像が入れ替わるたびごとに感受性

を自動調整して、瞬時に眼の能力を最高のところにもって行く。ウ。

しかしながら、暗くなると事情は変わる。同じ本のページを一〇ルクスで眺めるとすると、活字はまだしも、^Aインエイに富んだ写真はわかりにくくなる。次いで、一ルクスにいたると活字も見にくくなる。ほんとうは、もつとまえからものは見にくくなっているのだが、錐体は順応してがんばるから、ここまでなんとか見えるのである。だが、^Bここから先は勝手がちがう。

^(注) 杆体が活動しだすと、順応にも時間がかかるし、順応が終わってもよく見えるとはいいかねる。これが、いわゆる暗順応だ。典型的な暗順応は、昼間、明るい戸外から映画館の客席や、写真現像用の暗室に入ったときおこる。入った直後は闇かと思う。しかし、すぐに少しは見えた。これが錐体の順応である。そんな暗さでも、錐体は活動をやめてはいないが、どうもよく見えない。およそ一〇分で錐体は順応を終えるが、相変わらず暗い。と思っていると、急にすると周囲がはつきり見えた。するするという表現は^Cゴチヨウだが、それまでが意のままにならなかったのに比べると、そう感じる。杆体の順応がはじまったのだ。それから数十分後、杆体がほぼ順応を終えたところで、眼はその暗さで最高にはたらく状態に達している。といっても、大した見え方でないことは、だれでも知っている通りだ。

^C 眼の順応の一般的傾向は、「黒い眼」にも「青い眼」にも共通することはわかっている。しかし、まだ両者のちがいが論じられるところまではきていない。杆体のはたらく相当暗い範囲にいたつても、「黒い眼」と「青い眼」の能力差はあまりはつきりしない。私たちの今行っている実験では、平均的に見て「青い眼」はわずかな差ながら「黒い眼」よりよく見えた。ただ、なにぶんかなりの個人差がある。逆の結果を示す眼もないわけではない。眼球の透明度のちがいからすれば、暗いとき「青い眼」が「黒い眼」よりよく見えることは当然のようだが、断定はできない。

既述のように、「青い眼」の人たちが、じつさいに暗いところで読書する傾向があることや、暗い場所をつくってアイサニーやパーティーを楽しむことは事実である。「黒い眼」のわれわれの日常とはたいへんちがう。そのような行動観察の結果と合わせて考えると、一般的に「青い眼」の方が「黒い眼」より、暗さに強い眼をもっている可能性は大きいといえるだろう。

(乾正雄『夜は暗くてはいけないか 暗さの文化論』、朝日新聞社、1998年)

(注) 杆体…目の網膜にある視細胞の一つ。

問 1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は 19 ～ 25。

a カッショク

19

b ヒガ

20

c セイコウ

21

d ハイリョ

22

e ヒツジエ

23

f インエイ

24

g コチョウ

25

問 2 空欄 I ～ III に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同一番号は一度しか使えない。空欄 I の解答番号は 26、空欄 II の解答番号は 27、空欄 III の解答番号は 28。なお、完答しなければ加点しない。

- ① たとえは ② なぜなら ③ ようするに ④ 一方で ⑤ ほとんど
⑥ なお ⑦ したがって ⑧ しかも ⑨ しかし

問 3 空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 発展しない分野と思っていた
② 研究対象として認識していた
③ 不愉快なものと感じなかった
④ 簡単なテーマとして考えていなかった
⑤ 虹彩と関係が薄いと感じていた
⑥ 理解できるものと考えていなかった
⑦ 論じる方法を知らなかった
⑧ 国際的なテーマと捉えていなかった

問 4 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 両者の能力に違いはありと断定する
- ② 「黒い眼」より低照度がふさわしい
- ③ どのレベルにある照度にも対応できる
- ④ 「青い眼」より低照度がふさわしい
- ⑤ どのレベルにも最適範囲がある
- ⑥ 「青い眼」には高照度がふさわしい
- ⑦ 「黒い眼」より高照度がふさわしい
- ⑧ どのレベルにある照度でも順応できる

問 5 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① その順応が速くて、典型的なのである
- ② その順応が速くて、能動的なのである
- ③ その順応が速くて、消極的なのである
- ④ その順応が速くて、刺激的なのである
- ⑤ その順応が速くて、正確なのである
- ⑥ その順応が速くて、無敵なのである
- ⑦ その順応が速くて、一瞬なのである
- ⑧ その順応が速くて、粗雑なのである

問 6 傍線部 A 「少数派だ」の理由として最も適当なものを、次の①～⑦のうちから一つ選べ。

解答番号は 32。

- ① 欧米では働く場所がどれだけ明るいかを基準にして、職場の選択を行う人が多いことに対して、日本では明るさを働く場所の基準にする人が少ないから。
- ② 「黒い眼」は長時間の明るさに対して「青い眼」よりも耐えることがまったくできないといわれているが、これは日本では家庭などの照明を加減する人が少ないから。
- ③ 日本にも明るさに弱い虹彩を持つ人はいるが、本人はそれに気がつくことはなく、仮に気づいていたとしても明るさを調整することに気を遣うことはないから。
- ④ 眼の順応の一般的傾向は、「黒い眼」にも「青い眼」にも共通しているが、両者の能力差については未知の部分が多いということを知っている人が少ないから。
- ⑤ 「黒い眼」の眼球構造は「青い眼」のそれよりも明るさに対して鈍感であるため、日本では室内の明るさを調整しようとする人が欧米と比べて少ないから。
- ⑥ 欧米ではオフィスなど部屋の明るさを日常的に調整するほど、明るさに対して敏感であるが、日本では部屋の明るさを気にする人が少ないから。
- ⑦ 「黒い眼」は虹彩にある色素が光を吸収するために、日本では太陽光を気にする人が欧米よりも少なく、職場の照明器具などの光の量に対して無頓着であるから。

問 7 傍線部 B 「ここから先は勝手がちがう」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 周囲が明るい状態にあるとき、錐体を中心に眼は活動しているので人は物を見ることができ、暗い場所では錐体の動きが鈍くなるため、人の活動に制限が加えられているということ。
- ② 周囲が明るい状態にあるとき、すべての視細胞が一定の活動を続けていることに対して、暗い状態にあるときには一つの視細胞しか活動しておらず、実際に見えるはずのものが見えていないということ。
- ③ 周囲が明るい状態にあるとき、眼は錐体によって感受性を自動調整して周囲が見えるようにしているが、暗い状態になると、順応に時間を要し、杆体が働くことによってある程度見えるようになるということ。
- ④ 周囲が明るい状態にあるとき、「黒い眼」も「青い眼」も明るさに対して素早く順応することがわかっているが、暗い状態では「青い眼」の方が順応に時間がかからないことから、暗さに強いことがわかるということ。
- ⑤ 「黒い眼」と「青い眼」との違いについて、これまでの研究であきらかにされていることは、私たちの予想よりも多くはなく、単に、周囲が暗いときに「黒い眼」の方がよく見えるものの、結局は個人差によるところが大きいということ。

問 8 傍線部 C 「眼の順応の一般的傾向」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 人間の感覚器官は外部からの刺激の強弱に関わりなく感受性を固定させているが、眼は状況に応じて感受性を変化させ、周囲をよく見えるようにしているということ。
- ② 外部からの刺激に対して眼の能力を瞬時に最高のところに持つていく機能は、順応・暗順応ともに共通しているが、順応の場合は期待されるほど見えていないということ。
- ③ 人間の感覚器官は外部からの刺激に対応して感受性を変化させているが、眼もその時々のもろさに応じてもつともよく見えるようにしているということ。
- ④ 「黒い眼」と「青い眼」のどちらであっても感受性は自動調整され、時々のもろさに対応しているが、「黒い眼」の方が反応に時間がかかるということ。
- ⑤ 一般的に人間の感覚器官は外部からの弱い刺激のみを敏感に感知しているため、身体に負荷がかかるような刺激を受けると、特に眼球は、過剰な反応をしてしまうということ。
- ⑥ 「黒い眼」と「青い眼」のどちらも感受性は自動調整されているが、眼球を保護するために「青い眼」の方が自動調整に時間がかかるということ。

問 9 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 眼球の構造と眼が持つ色素
- ② 環境に左右される眼の色素
- ③ 目の色素層における表と裏
- ④ 「まぶしさ」の研究と日本
- ⑤ 虹彩の色による眼のちがい
- ⑥ 西洋とアジアのグレア研究
- ⑦ 西欧のオフィスの調光具合
- ⑧ 生物によって異なる外装材

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、完答しなければ加算しない。解答は解答番号 36 の二ヶ所にマークすること。

- ① 人間が本来持っている身体的な構造が、環境によつて変化しやすいというのは生物学的に指摘されていることであり、その顕著な例が日本人と欧米人とに見られる眼の色の違いである。
- ② 西洋人のことを「青い眼」と称するのは、眼球の奥の方まで透けて見えるためであり、日本人のことを「黒い眼」とするのは、虹彩の裏側にある色素が瞳の黒眼と一体であることによるためであり、両者の違いはいわゆる外装以外には何もない。
- ③ 「まぶしさ」に関する日本での研究は、一九五〇年代になって始まったが、その研究結果は予想されていたものと大差はなかったものの、まぶしいと感じる輝度について、「青い眼」が「黒い眼」の半分程度であったというのは欧米人しか気づいていないことであつた。
- ④ 「青い眼」が眼球保護のために夏の戸外用の黒眼鏡を欠かせないというのは、「黒い眼」よりも光を多く取り込むからであり、この事実は「青い眼」がまぶしさに対して耐久力がないことを示している。
- ⑤ 眼にとって一〇〇ルクスは、不自由なく読書できる明るさであり、仮に一時間休みなく読みつづけるとしても、例えば五〇〇ルクスの場合と効果の差が出ないというのは、眼の最適範囲が曖昧であることを示している。
- ⑥ 外からの刺激に応じて感受性を変化させる順応という生物的な現象は人間が生存していくためには不可欠なものであるが、このような現象は昼夜を問わず生活する人の眼にのみ見られる特徴的な機能であるといえる。
- ⑦ 眼が見える仕組みそのものは、洋の東西を問わず共通しているが、眼球の透明度のちがいという観点からすれば、両者の能力差は明確にされておらず、暗いとき「青い眼」が「黒い眼」よりよく見えることは当然であると一般的に考えられているだけである。
- ⑧ 「青い眼」の人たちが、暗い場所で夕食や人との集まりを楽しんでいるのは、「黒い眼」を持つ人々とは異なる生活形態であるが、この事実を踏まえると、「青い眼」の方が「黒い眼」より、暗さに強いと考えられる。